

伝染病の歴史—疫病から感染症に

順天堂大学医学部医史学研究室

酒 井 シ ヅ

医学の歴史は疫病との戦いの歴史でもある。我が国の伝染病の歴史は有史前にさかのぼることができる。

日本の疫病史に関して富士川游『日本疾病史』や山崎佐の『日本疫史及防疫史』などの名著があり、その後も、内外の伝染病史に関する著作が多く出ている。

今回はそれらを参考に、有史前からの伝染病について、名称の変化、伝染病の広がり方、人々の伝染病への見方の変化、伝染病患者と社会との関わり方の推移、時代とともに変化した伝染病の概念などを明らかにして、我が国の伝染病史ならびに概念の特質について検討したい。

我が国の伝染病史は、弥生遺跡に現れた結核や寄生虫症に始まるが、有史以後は『日本書紀』の崇神天皇五年に全国各地で疫病の大流行があった記事がもっとも古い記事である。そのあと、疫疾の記録は後を絶たないが、人から人へ伝染する疫病のほかに、マラリアのように中間宿主を介して伝染する疫病の記録もある。さらに時代が下ると、海外との交流で新たな伝染病が現れた。また、近代になり、伝染病の本態が科学的に明らかになって伝染病史は新たな様相を見せるようになった。

疫病の呼称は時代によって異なった。記紀には「えやみ」あるいは「えのやまい」とある。

『箋注和名類從抄』には「疫」説文云、疫 音役衣夜美、一云度岐之介」とある。狩谷棧斎は注に、「崇神紀、敏達紀の疫疾、欽明期の疫はすべて衣也三と訓ずる。衣夜美は民が皆、これを疾むから民は皆赴く役と同じ発音である。」

衣夜美は少し時代が下り、平安時代になると、^{れい}癘あるいは^{おこり}瘧病と呼んだ。『和名類從抄』には「癘」について「説文に云う、音は例、阿之岐夜万比」とある。また「瘧病」の項には「説文云、瘧、音

は虐、俗に言う衣夜美、一に云う和良波夜美」とある。狩谷は、瘧は『源氏物語』や『萬安方』で「わらわやみ」と訓ずるが、それはこの病が軽重の違いがあっても一国みなこの病に罹るからであると注解する。

古代では全国に広がる疫病あるいは虐病の原因は一国に責任ある天皇の失政であると考えたが、時代が下るにつれて疫鬼が登場する。

さらに時代が下ると、疫病の呼称に代わって痘瘡、赤痢、麻疹のように個々の流行病の記録が出てくる。但し、それぞれの名称は時代によって変化した。

疫病に変わって「伝染病」が使われるようになるのは幕末である。人から人へ伝染することをはっきり示した名称である。この見方を日本で最初に言ったのは甲斐の橋本伯寿であった。西洋医学書に先んじていた。

しかし、西洋医学の導入と一致して、「伝染病」の呼称が一般に使われ、伝染病の感染経路を明らかにすることが重要な課題となった。

明治になると「伝染病予防法」が制定され、伝染病は疫病とまた違った意味で人々から恐れられた。細菌学の登場により黴菌の呼称とともに巷間に恐怖が広まった。

なお、明治には新語であった伝染病も昭和になると、手あかじみてきた。特に、戦後、抗生物質によって伝染病が苦労少なく治る病気となつてから、いまさら伝染病でもないと、1960年代に伝染病学会は伝染病に代わって「感染症」を採用した。

1994年には伝染病予防法が廃止され、「感染症の予防および感染症の患者に対する医療に関する法律」(通称感染症新法)が制定された。なお、一時、医学教育の中で、感染症の講義数が著しく減少したことがあった。その後、エイズが発生し、

院内感染や再興感染症が社会問題になって、感染症学が重視されるようになった。

疫病には痘瘡のように、国内で発生を繰り返してきた疫病もあるが、新しい疫病は海外から入ってきた。古代から近世に至るまで、海外との接触がもっとも多かった九州では、この土地を皮切りにはじまった伝染病の大流行を何回も経験した。その最たるものが梅毒とコレラであった。しかし、交通手段が発達し海外との接触が多様化した現代では、全国のどこにいても珍しい伝染病の最初の発病者になりうる。

疫病に対する戦いは古代から真剣であった。疫神を祀り、大がかりな祈祷を行った。平時にも鎮花祭など祭りをを行い、神の心を慰撫した。子供の成長を祝う通過儀礼も盛大に行った。その経過を

へて、種痘のように経験的に知った合理的な防疫法が予防手段として確立していったが、疫病が伝染病となり、感染経路が明らかになったとき、患者の隔離が社会防衛のために最善の手段であると認識された。

明治以後、コレラ流行時に全国的に避病院が設置され、伝染病への隔離対策がとられた。その後、避病院における絶対隔離が続き、らい予防法が制定されると、当初、放浪するらい患者の収容が目的であった収容施設が隔離施設となり、さらに絶対隔離が実施された。それが人権問題という認識にいたるまで長い時間を要した。

感染症新法が伝染病予防法ともっとも違う点のひとつは絶対隔離をやめて、人権を考慮した点である。